

平成18年度日本雪氷学会公開シンポジウム

雪と氷の大陸「南極」から 地球の環境をさぐる

展示・講演: 10:00～16:00

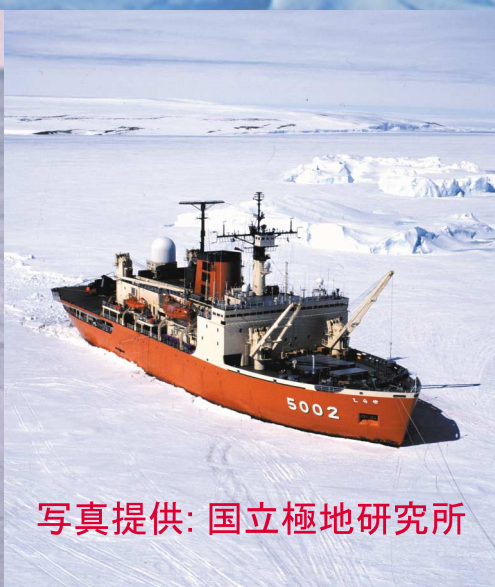
■ 会場: 秋田市民交流プラザ ALVE

■ 対象: 小・中学生～一般

■ 参加費: 無料

主催: (社)日本雪氷学会

平成18年度 文部科学省科学研究補助金 研究成果公開促進費「研究成果公开发表(B)」補助事業
(課題番号 1852006)



写真提供: 国立極地研究所

ごあいさつ

～ 南極の世界へようこそ ～

南極は地球温暖化の影響が先駆けて現れる場所であり、南極における様々な観測や研究は地球環境の変遷と将来をさぐるために重要な意味を持っています。また、秋田県は、我が国の南極探検のパイオニアである白瀬中尉の出身地であり、南極ゆかりの地です。

このシンポジウムは、白瀬中尉による探検の時代に始まる日本の南極観測の歴史をふり返し、さらに将来の研究も展望する講演・展示会です。白瀬中尉が使用した犬ぞりや南極の氷などの展示、昭和基地とのテレビ対話なども企画しています。

どの企画も、小学生から大人の皆様まで楽しめる内容です。ごゆっくりお楽しみください。

(社)日本雪氷学会

プログラム

・講演（13:00～14:30）

「白瀬南極探検隊秘話」 佐藤忠悦氏（南極探検隊長白瀬矗顕彰会副会長）

「南極観測50年の歩み」 渡辺興亜氏（国立極地研究所名誉教授）

「南極観測からわかること」 東久美子氏（国立極地研究所助教授）

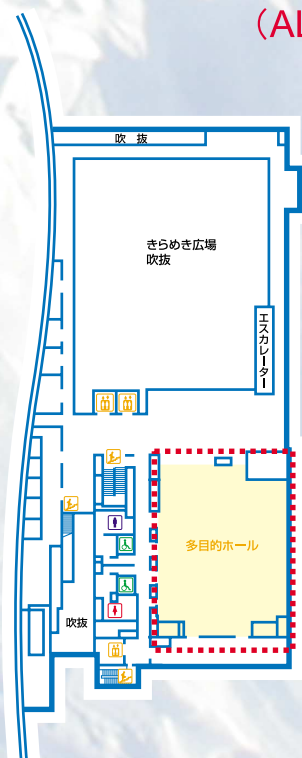
・南極昭和基地とのテレビ対話（15:00～15:30）

・展示（10:00～16:00）

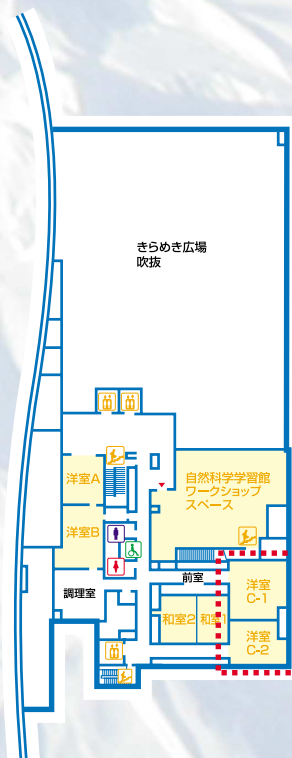
白瀬南極探検隊犬ぞり、南極の氷・隕石、研究紹介など

会場案内図

講演・テレビ対話: 多目的ホール
(ALVE 2階)



展示: 洋室C (ALVE 4階)



■ 講演

「白瀬南極探検隊秘話」 佐藤忠悦氏(南極探検隊長白瀬矗顕彰会副会長)

白瀬矗は文久元年(1861)秋田県金浦(現にかほ市金浦)の浄蓮寺の長男として生まれる。腕白少年だった彼は、11歳の時、寺子屋の先生佐々木節斎からイギリスの北極探検家ジョン・フランクリンの話聞き北極探検を志す。明治42年(1909)アメリカの探検家ペアリーの北極点踏破を新聞で知り目標を南極に転換。明治43年(1910)11月、204トンの開南丸で南極に向けて出帆した。白瀬49歳であった。



「南極観測50年の歩み」 渡辺興亜氏(国立極地研究所名誉教授)

南極観測は1956年、排水量5千トン足らずの観測船「宗谷」から始まり、現在ではその4倍の排水量を持つ「しらせ」となり、昭和基地への物資搬入量も140トンから1千トンへと増え、観測計画は質的にも、規模としても大きな発展を遂げている。現在、日本の観測基地は内陸高原ドーム頂上の基地を含む3つの内陸基地を擁し、世界的にも例を見ない観測プラットフォーム網となっている。

50年におよぶわが国南極観測の歩んできた道を紹介する。



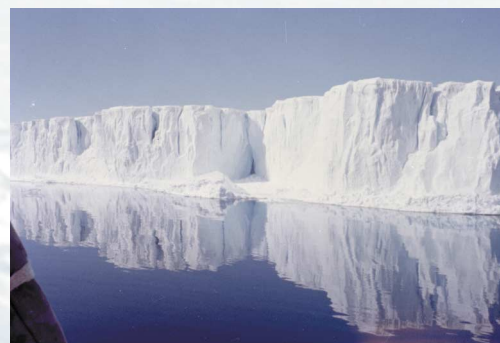
「南極観測からわかること」 東久美子氏(国立極地研究所助教授)

南極には過去から現在まで降り積もった雪が、融けずに冷凍保存されている。南極で氷を掘削し、分析すれば、雪が降った当時の気候や環境を知ることができる。日本の南極観測隊は1996年12月に深さ2053mまでの掘削に成功し、2006年1月には深さ3029mまでの掘削に成功した。本シンポジウムでは、南極における氷の掘削や雪氷観測の状況を紹介し、掘削した氷の分析結果から分かる過去30万年以上の気候・環境変動について述べる。また、今後の研究の展望についても述べる。



■ 展 示

- ・白瀬探検隊の航海ルートと航海日誌
- ・白瀬探検隊が使用した帆船「開南丸」の模型と犬ぞり（レプリカ）
- ・日本の観測隊が掘削した氷床コア（レプリカ）
- ・南極で発見された貴重な隕石（月・火星起源のもの）
- ・南極の氷（さわれます）
- ・南極の自然・観測内容を紹介する映像
- ・日本の観測隊が使っている本物の防寒着（試着できます）



（展示は白瀬南極探検隊記念館・国立極地研究所のご協力をいただいています）

■ 南極昭和基地とのテレビ対話のしくみ

通信衛星を利用して会場と南極・昭和基地をテレビ会議システムでつなぎ、観測隊員と直接ライブ会話ができます。（日本との時差は、－6 時間です）

